

竜胆瀉肝湯が奏功したむずむず脚症候群の2例

臨床 § 症例

峯 尚志

肝胆の湿熱・肝風・瘀血の観点から漢方的アプローチを試みた臨床報告

はじめに：むずむず脚症候群と漢方的視座

西洋医学的理解

むずむず脚症候群（Restless Legs Syndrome：RLS）は、夜間に下肢の不快感と動かしたい衝動をきたし、睡眠を著しく妨げる疾患である。病態として鉄欠乏やドパミン系機能異常の関与が指摘されているが、全例に有効な治療法は確立されておらず、難治例も少なくない。

漢方的アプローチ

本報告では、下肢や頭部に生じる不随意かつ不快な感覚を、肝胆の湿熱・肝風・瘀血という病理的枠組みでとらえる。竜胆瀉肝湯を治療の軸としつつ、通導散や桂枝茯苓丸を適宜合方した2症例を報告し、その奏効機序を考察する。



竜胆瀉肝湯の構成と方意

清肝瀉火

竜胆・黄芩・山梔子

肝胆の実火を直接瀉し、熱邪を除去する。苦寒の主薬群。

清利湿熱

沢瀉・木通・車前子

利尿を促し、下焦の湿熱を膀胱より排出する。

養血滋陰

当帰・地黄

苦寒薬による陰血消耗を防ぎ、補瀉を両立させる。瀉中の補。

疏肝・引経

柴胡・甘草

肝気を疏通し、諸薬を肝経へ誘導する。清利の全体を調和。

本方の効能は清瀉肝胆実火・清利肝経湿熱であり、主治は肝胆実火の上炎（頭痛・目赤・耳鳴・脇痛・口苦）および肝経湿熱の下注（陰部の腫痛・掻痒・帯下・小便淋瀝・下肢の湿熱症状）に及ぶ。清熱と利湿を上下から同時に図る「清利の方剂」である。

症例1：32歳、女性

主訴：大腿部から下腿部にかけてのイライラ感・むずむず感

現病歴

幼少期よりむずむず足・イライラ足を自覚。2年前より夜間に大腿部から下腿部の強いイライラ感が出現し、叩きたくなくなる衝動を伴う。今週は一睡もできない日があった。常に身体が熱っぽく、手が火照る感覚があり、周囲からも体温が高いと指摘される。咽の乾きが強く、1日2リットルの水分摂取を要する。

身体所見・漢方所見

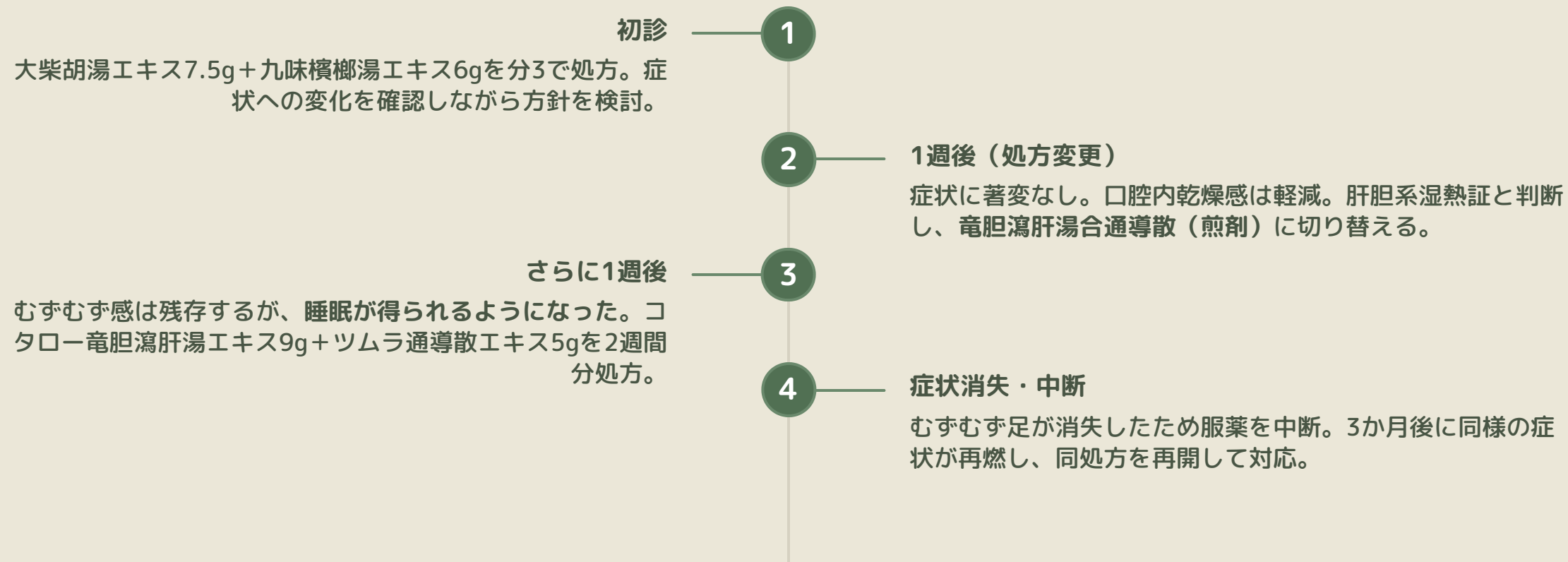
身長150cm、体重50kg。採血では特記所見なし（TG 79、HDL 79、LDL 111：正常範囲）。

脈：沈・弦。舌：やや紅色、齒痕著明、白苔。

腹部：肥満、腹力5/5、胸脇苦満あり、両臍下部に圧痛・抵抗あり。腓腹筋に圧痛。便通は2～3日に1回。

① 漢方的診断：肝胆湿熱証＋瘀血 — 熱感・口渇・胸脇苦満・臍下圧痛・便秘の組み合わせが本証の核心を形成する。

症例1：治療経過



竜胆瀉肝湯による清利湿熱と、通導散による駆瘀血・通便の合方が、下肢の湿熱停滞と瘀血を同時に解消し奏効したと考えられる。

症例2：45歳、女性

主訴：頭に電気が走る感覚・身体のぴくつき

現病歴

1年前より就寝中に身体がピクッと動く不随意運動が出現。こめかみ周辺・頭内で電気がスパークするような感覚（「バシッ」と鳴る）を自覚。こむら返りが頻発。逆流性食道炎があり、食べすぎ時に胸やけを生じる。子宮筋腫（4～5cm）が5～6個確認されており、明らかな瘀血の病理的背景が認められる。

身体所見・漢方所見

身長162cm、体重62kg。
脈：沈・弦・滑・数。舌：小さくやや胖、黄苔少量。
腹部：肥満、腹力5/5、両臍下部に圧痛・抵抗あり。
胸脇苦満の所見を確認。

⚠ 脈の滑数＋黄苔＋子宮筋腫の存在は、湿熱・瘀血の複合病態を示唆する。

症例2：治療経過

1

第1段階

肝血虚・内風・瘀血として抑肝散加陳皮半夏エキス7.5g+桂枝茯苓丸7.5gを処方。1週間で全身のピクンが著明に改善。

2

第2段階（処方変更）

食べすぎるとこめかみでピシーと音が鳴る症状が持続。湿熱の関与を考慮し、コタロー竜胆瀉肝湯エキス9g+ツムラ桂枝茯苓丸を分3で処方。

3

1週後：著明改善

冷え改善、ピクン改善、睡眠改善・悪夢消失。こめかみの電気感・頭内爆発感が軽減。こむら返りも消失。

第1段階で肝風・瘀血を制した後、竜胆瀉肝湯へ切り替えることで残存する湿熱を清利し、睡眠の質が飛躍的に改善した点が特筆される。

2症例の漢方病態の比較

一例目



【症例1：32歳女性】

むずむず脚、熱感、口渇、肝胆湿熱、竜胆瀉肝湯＋通導散。

二例目



【症例2：45歳女性】

頭部電撃様感覚、身体のぴくつき、肝血虚生風・血瘀、抑肝散＋桂枝茯苓丸、後に竜胆瀉肝湯＋桂枝茯苓丸。

両症例に共通するのは肝経の病変であるが、主病機は異なる。症例1は実熱（湿熱）が主体であり、症例2は虚実挟雜（肝血虚＋内風＋瘀血＋湿熱）の複合病態であった。いずれにおいても、最終的に竜胆瀉肝湯が奏効した点は示唆的である。



考察

湿熱と瘀血の相関

湿熱の停滞は気血の流れを阻害し、瘀血を形成しやすい。この病理的連鎖がRLSの夜間増悪・不眠を引き起こすと考えられる。清利湿熱（竜胆瀉肝湯）と駆瘀血（通導散・桂枝茯苓丸）を同時に図ることが奏効の核心であった。

肝風の関与

症例2のぴくつき・電気感・こむら返りは「肝風内動」の表出と解釈できる。抑肝散加陳皮半夏による熄風鎮痙を先行させ、内風を制した後に竜胆瀉肝湯で湿熱を清利する段階的アプローチが有効であった。

西洋医学との対比

西洋医学ではドパミン作動薬や鉄剤が用いられるが、難治例では限界がある。本2例は標準的薬物療法では対応困難な病態に対し、漢方的弁証論治が有効な手段となりうることを示す。

まとめ



病態の漢方的定義

RLSおよび類縁の不随意・異常感覚を、肝胆の湿熱・肝風・瘀血として体系的にとらえることで、漢方的弁証論治の道が開かれる。



竜胆瀉肝湯の有用性

竜胆瀉肝湯を軸に駆瘀血薬（通導散・桂枝茯苓丸）を合方することで、むずむず感・不随意運動・こむら返り・睡眠障害が消失または顕著に改善した。



今後の展望

西洋医学的に難治なRLSに対し、東洋医学的アプローチが治療の一助となることが期待される。

- ① 湿熱と瘀血を同時に治すことが奏効の鍵であった。漢方医学の弁証論治はRLSという西洋医学的難治疾患に対しても有効な治療的視座を提供しうる。